HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	サンクト・ペテルブルク大学における古民族学派 : 帝政ロシアの先史考古学とФ.Д.ヴォルコフ
Author(s)	加藤, 博文
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 125, 33(左)-55(左)
Issue Date	2008-06-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33917
Type	departmental bulletin paper
File Information	KATOU.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北大文学研究科紀要 125 (2008)

サンクト・ペテルブルク大学における古民族学派
── 帝政ロシアの先史考古学と Ф. Д. ヴォルコフ ──

加 藤 博 文

はじめに

1997 年 4 月，ペテルブルクにおいてロシア民族学博物館とサンクト・ペテルブルク大学歴史博物館の共催によるフョードル・コンドラチエヴィチ・ヴォルコフ（Федр Кондратьевич Волков 1847–1918）の生誕 150 周年記念国際シンポジウムが開催された。その中でヴォルコフによって収集された膨大なコレクションと彼によって基礎が作られ，発展された 20 世紀初頭のペテルブルク大学における旧石器研究についての検討がなされた。ロシアにおける原始（先史）考古学[1] の発達において長く西ヨーロッパ，とりわけフランスの学会において活躍し，多くの資料と知見を 20 世紀初頭のロシアの考古学会へもたらした功績が改めて評価されたといえる（Тихонов И. Л. 2003 Археология в Санкт-Петербургском университете, Издательство С-Петербургского университет, с. 130.）。

ヴォルコフの創設した「古民族学」の流れは，1917 年のロシア革命後に成立したソヴィエト体制が確立していく過程で，1930 年代に粛清の対象となった。1960 年代においても，この影響からか，ヴォルコフのソヴィエト民族誌学や人類学における評価は，必ずしも高いものではない。そのようなソヴィ

[1] ロシアにおいては先史（доисторический）よりも，原始（пербытный）が用いられることが多い。

エト考古学における評価が反映されてか，西側の考古学におけるソヴィエト考古学の評価でもヴォルコフの位置づけは高くはない。たとえば，考古学史研究として高い評価を得ているブルース・トリッガー（Bruce G. Trigger）の著作《A History of Archaeological Though, 1989, Cambridge University press》においても革命前後の研究者の動向に触れる中でアレクサンドル・ゴロドツォフ（В. А. Городцов 1860–1945）やアレクサンドル・スピーツィン（А. А. Спицын 1858–1931），アレクサンドル・ミラー（А. А. Миллер 1875–1935）の名は挙がるが，ヴォルコフの名は登場しない。

ロシアにおける先史考古学，とりわけ旧石器時代研究の発達を見るとき，ヴォルコフが果たした役割は彼自身の調査研究のみならず，後継者の育成という点でも重要な役割を果たしており，ソヴィエト考古学のもつ特色の一つを作り出している。本小論においては，ヴォルコフによるペテルブルク大学における「古民族学派」の創設過程を学史的に検討することから革命前後のロシア／ソヴィエトにおける考古学的知の流れの一端を描き出してみたい。

１．帝政ロシア期における考古学の系譜

ロシアにおける考古学の開始は，18 世紀のピョートル大帝期に遡る。西欧の科学技術や芸術のレベルに追い付くための学術研究・教育機関の創設が計画され，それに基づいて科学アカデミーと大学が設置される。設置のための元老院布告は 1724 年に出されたが，発足はピョートルの死後の 1725 年であった（加藤 2008）。設置された大学において講じられたのは，他のヨーロッパ諸国と同様に古典諸学であったが，ロシアにおける特色として早くからスラヴ民族やロシア民族の起源への深い関心が寄せられていた点は注目に値する。しかしその基本は，初期のロシアの大学で考古学に関心をよせた学生たちの多くが基礎を学び，研鑽を深めたのがゲッチンゲン大学のクリスチャン・G. ハイネ（Christian G. Heyne, 1729–1812）の下であったことからもわかる通り，あくまで古典考古学を基礎としていた[2]。

19 世紀に入るとサンクト・ペテルブルク大学における考古学は複数の学部

で展開されることとなる。これは他のヨーロッパ諸国の考古学の歴史においても同様で，考古学という近代科学が持つ二つの系統に起因するものである（角田 1971）。一方の考古学の流れは，15 世紀に遡る古典考古学の流れであり，もう一方の流れは，近代の啓蒙思想の中で地質学や生物学の深化とともに成立してきた先史考古学の流れである。このような考古学の流れをロシアにおいて見ていく際には，古典考古学と先史考古学に加えてさらに東洋学の流れの中での考古学に注意する必要がある。以下においては，このようなサンクト・ペテルブルク大学における考古学の複数の系統についてロシア考古学の学史を記した著作を参考にしながら概観しておきたい（Формозов　1983; Леведев 1992 ほか）。

1−1．古典考古学とスラヴ・ロシア考古学の流れ

この古典考古学とロシア民族史の流れは，19 世紀に入り歴史・哲学学部の中で継承されていく。サンクト・ペテルブルク大学においては，1865 年からコンスタンチン・ベストゥジェフ＝リュミン（К. Н. Бестужев-Рюмин 1829–1897）によって考古学的資料も交えたロシア史が講じられていた。また 1887 年からはニコディム・コンダコフ（Н. П. Кондаков 1844–1924）によって古典考古学の講義が始められている。ベストゥジェフ＝リュミンの下からはロシア考古学の体系を確立するアレクサンドル・スピーツィン（А. А. Спицын 1858–1931）が，またコンダコフの下からは世界的な古典考古学者として活躍するミハイル・ロストフツィエフ（М. И. Ростовцев 1870–1952）やボリス・フォルマコフスキー（Б. В. Формаковский 1870–1928）らが輩出している。

サンクト・ペテルブルク大学の歴史・哲学学部における考古学研究と教育は，芸術理論と芸術史講座において行われたが，1909 年にスピーツィンが考

[2] ハイネが 1767 年以来大学においては講じた古典考古学は，彼の死後に Archäologie der Kunst des Altertums, insbesondere der Griechen und Römer, Braunschweig 1822 として出版された。

古学を講じるため歴史・哲学学部へ招へいされ，翌 1910 年には歴史・哲学学部に図書室を備えた考古学研究室が開設されている。ここから多くの考古学者たちが巣立ち，サンクト・ペテルブルク大学歴史・哲学学部の考古学研究室はロシアにおける考古学研究と教育の中心的役割を果たしていくこととなる。

1−2．東洋言語学部における考古学

ロシアの他の大学にはない独自の教育組織として知られていたのが，サンクト・ペテルブルク大学東洋言語学部であった。主としてここで行われた研究と教育は歴史的文献の研究であったが，その中でも考古学調査を自ら行う研究者たちが輩出されている。

この学部の出身でスキタイ文化のクルガンの調査研究に数多くの業績を残した研究者には，ニコライ・ヴェセロフスキー（Н. И. Веселовский 1848-1918）がいる。1881 年からロシア考古学協会の通信会員としても名を連ねたヴェセロフスキーは，トルキスタンや黒海北岸において発掘調査を実施している。後に大学においても東洋史のコースで中央アジア史やユーラシアの遊牧民の歴史を講じた。このような考古学資料も用いた東洋史の講義を受講した学生の中からは，著名な東洋学者として知られるワシリー・バルトリト（B. B. Бортольд 1869-1930）や東洋学者・インド学者として知られるセルゲイ・オリデンブルク（С. Ф. Ольденбург 1863-1934），言語学者でかつ後に科学アカデミー物質文化史研究所所長となり「マルの言語理論」で議論を巻き起こすニコライ・マル Н. Я. Марр 1864-1934）などを輩出している。

1−3．物理・数学学部における人類学研究

19 世紀後半のサンクト・ペテルブルク大学の物理・数学学部の自然科学部門は，ロシアの自然科学研究の中核的存在であった。すでに 1833 年には動物学講座が開設され，ロシアにおける進化主義の主張者であったクトルガ（C. C. Куторга 1805-1861）が主任を務めていた。彼の多くの研究成果の中にはベロルシア出土の二つの古代人の頭蓋骨に関する研究が知られている。

1870 年から 1880 年代にかけての時期には，数多くの著名な生物学者が活躍していた。コヴァレフスキー（А. О. Ковалевский 1840–1901）は，ライエルのロシア語への翻訳をおこなったが，人類の起源に関心をもち，古代の生活史に関わる問題に関心を寄せている。この 1870 年代[3] には，このような教授陣の影響を受けて，この学部から多くの研究者が育っている。代表的な研究者を挙げるならば，中央シベリアのクラスノヤルスク市郊外で旧石器文化の遺跡としてヨーロッパでも注目されたアフォントヴァ山遺跡群を発見したイヴァン•サヴェンコフ（И. Т. Савенков 1846–1914）がいる。また同時代の在籍者として忘れることができないのは，イヴァン・ポリャーコフ（И. С. Поляков 1845–1887）である[4]。ポリャーコフは，旧石器時代のコスチョンキ遺跡の発見者として，また中央アジア，極東ロシア，サハリンを旅し，数多くの重要な報告を残した研究者としてもその名を広く知られている。しかし，ロシア科学アカデミー動物学博物館の研究員であった彼は，大学で直接の後継者を育成することはなかった。

1870 年代の物理・数学学部の自然科学部門における考古学への取り組みは，多くの人材を出しながらも考古学を専門に教授する研究者と研究室を持ち得なかったために断続的な活動とならざるをえなかったのである。しかし，歴史・哲学学部や東洋言語学部と異なり，自然科学系の物理・数学学部において人類学や考古学への関心が芽生えている点は，この後の先史考古学の研究基盤の形成を考える際に注目すべき点である。

---

[3] ロシアにおける最初の旧石器時代の遺跡の発見は 1871 年，イルクーツク市の陸軍病院遺跡においてロシア地理学協会会員であるチェルスキー（И. Д. Черский 1845–1892）とチェカノフスキー（А. Л. Чекановский 1833–1876）によってなされている。

[4] ポリャーコフの学術的関心の幅広さに大きな影響を与えたのは，著名な地理学者で社会運動家であったクロポトキン П. А. Кропоткин (1842–1921) であったことは広く知られている。

2．自然科学から先史考古学への流れ

先に見てきたように他のヨーロッパ諸国と同様にロシアにおいても古典考古学（スラブ・ロシア考古学を含む）と人類学や先史考古学では，その学問形成過程において，基盤とする学問領域によって異なる系譜を持つことが明らかである。この後，サンクト・ペテルブルク大学では，先史考古学の領域は，歴史・哲学学部や東洋言語学部ではなく，物理・数学学部の研究室の中から形成されていく。以下においては，物理・数学学部において考古学と関わった3名の研究者の活動に触れながらこの流れを跡付けていきたい。

2−1．メレジュコフスキーとクリミアの旧石器

コンスタンチン•メレジュコフスキー（К. С. Мережковский 1855–1873）は，ロシア旧石器考古学においてクリミア半島部の旧石器文化の発見者として知られている（Формозов 1983）。メレジュコフスキーは，物理•数学学部に1876年に入学し，当初は植物と動物の組織学を専攻した。卒業を控えてその関心は人類学へ向けられ，1879年と1880年にクリミア半島で洞窟を調査している。旧石器時代の遺跡であるシュレニ1とシュレニ2の発見については，ロシア地理学協会報告にその報告書を掲載している（Мережковский 1880; 1881）。

この後1880年にメレジュコフスキーは，教授候補として留学を命じられる。イエナ，ライプチップ，パリで学び，パリにおいては，ピエール•ブローカ（P. P. Broca 1824–1880）とガブリエル•モルティエ（G. de Mortillet 1821–1898）によって創設されたパリ人類学学院と人類学協会と関わりをもち人類学に関する関心を深めている。帰国後は母校の物理・数学学部に動物解剖学教室を開設し後進の育成に従事した。しかし，帰国後メレジュコフスキーはペテルブルク大学付属人類学協会に名を連ねてはいるものの，自ら考古学を実践することはなかった。彼の収集した資料が活用されるのは20年後のことである。

2−2．イノストランツォフの地質学教室と展示室

メレジュコフスキーの後を継ぐ形で，物理・数学学部において考古学調査をおこない，資料収集に力を注いだのはアレクサンドル・イノストランツェフ（A. A. Иностранцев 1843–1919）である。イノストランツェフは，物理・数学学部の地質学教室を主宰する地質学者であるとともにロシア考古学においては，古生態学的な視点から考古学調査を行い『ラドガ湖沿岸の石器時代の先史人』（1882）を著したことで高く評価されている研究者である。イノストランツェフの功績は，著作に留まらない。1870 年代頃から収集が開始されたとされる（Тихлнов 1995: 103）膨大な考古学コレクションは後の世代の貴重なコレクションの基礎となった。

教室に付設された展示室には，当初，地質学や古生物学資料が主に収蔵されていたが，やがて考古学資料も収集されイノストランツェフ自身による収集資料以外にもシベリアなどから持ち込まれる資料があった。また他の研究者の資料も随時収蔵されている。ロシアの土壌学の基礎を確立させたドクチャーエフ（B. B. Докучаев 1846–1903）が収集したり，ポリャーコフなどと発掘した資料なども地質学教室の展示室へ持ち込まれている。先にみたメレジュコフスキーが 1879 年と 1880 年に発掘したクリミア半島シュレニ 1 遺跡とシュレニ 2 遺跡出土の石器類や，同じくキズィル・コヴァ遺跡出土の石器類（約 45000 点）もこの資料室に収蔵されている。

このイノストランツェフが資料を収集した時代は，ヨーロッパ各地で先史考古学の芽が花開いた時代であった。デンマークのクリスチャン・トムセン（C. J. Thomsen 1788–1865）の三時期区分法を提示し『北欧古代学入門』が刊行されたのは 1836 年である。1838 年にはスウェーデンのルンド大学のスヴェン・ニルソン（S. Nilsson 1787–1883）が『北欧スカンディナヴィアの原住民』を刊行し，1851 年にはダニエル・ウィルソン（Daniel Wilson 1816–1892）が『スコットランドの考古学と先史時代の年代』（1851）を著している。またジョン・ラボック（J. Lubbock 1834–1913）が『先史時代』を公刊し，石器時代を旧石器時代と新石器時代とに区分する案を示したのは 1865 年であった。新たな領域の考古学をめぐる研究者の関心は高まり，1860 年にはスイス

のヌーシャテルにおいて第一回国際人類学・先史考古学会議が開催されるに至っている。19 世紀の半ば，まさにヨーロッパにおいて先史考古学が新たな学問として花開いた時期であり，イノストランツェフによる活動もそのようなヨーロッパを取り巻いた動きの一端をなしていたと見ることができる。

2−3．ペトリと地理学・民族誌学講座

イノストランツェフによる研究室の資料の収集と整備が，後のサンクト・ペテルブルク大学における考古学の進展に大きく寄与したことは疑いない。しかし，イノストランツォフ自身の考古学への関心は，個人的範疇を超えるものではなく，組織的な展開には結びつかなかった。この意味においてサンクト・ペテルブルク大学に先史考古学の流れを持ち込んだのは，次にあげるエドゥアルド・ペトリであったと言える。

エドゥアルド・ペトリ（Е. Ю. Петри 1854–1899）は，物理・数学学部に設置された地理学・民族誌学講座の初代教授であった。この講座の開設は 1887 年 8 月であり，これは 1884 年に国民教育省の布告に基づくもので，これによってそれまで歴史・哲学学部にあった地理学・民族誌学講座は物理・数学学部へと移管されることとなった。この地理学・民族誌学講座を自然科学系の学部へ移管するにあたってはイノストランツェフの意向が大きく働いたことが指摘されている（Невский 1977）。

ペトリ自身の略歴で特筆すべきは，医学・外科アカデミーの学生時代にドイツとスウェーデンへ留学する機会を得ており，彼の地で地理学，物理学，先史人類学の講義を聴講する機会に恵まれている点である。最終的に 1880 年にベルン大学において医学博士の学位を取得しているが，そのまま 1883 年にはベルン大学の地理学・人類学講座に奉職している。1887 年にペトリはペテルブルクへ呼び戻されるが，ロシア地理学協会において地理学や教育制度についての講演を行っている。

1887 年 7 月 29 日より正式にサンクト・ペテルブルク大学物理・数学学部地理学・民族誌学の教授として着任している。ペトリの講義は総合人類学とも呼ぶべきもので，それまでのサンクト・ペテルブルク大学においてはなされ

てこなかった人類学の講義であった。この講義概要はペトリ自身によって一冊にまとめられている（Петри 1890）。ペトリにおける人類学の位置づけは，その著作に従えば，人類の自然史というものであった。またペトリは人類に関する問題への取り組みとして具体的に，人類の起源の問題，彼らを取り巻く環境，彼らの道具構成を通じて復元することを目指していた。

ペトリが率いる地理学•民族誌学講座の特色は，その活動が 1888 年に設立されたサンクト•ペテルブルク大学付属人類学協会（РАОПУ）と深く結びついていたことである。この協会は自然科学者を中心にその組織の要求が高まったもので，会長にはイノストランツェフが就任し，当代の著名な科学者であるドミトリー•メンデレーエフ（Д. И. Менделеев 1834–1907），物理学者イワン•セーチェノフ И. М. Сеченов 1829–1905）なども会員として名を連ねていた。

1899 年のペトリの死後は，地理学・民族誌学講座にはドミトリー・コロプチェフスキー（Д. А. Коропчевский 1842–1903）が助教授で着任した。彼はモスクワ大学の動物学者であり人類学者であったアナトーリー・ボグダーノフ（А. П. Богданов 1834–1896）の教え子であった。コロプチェフスキーは人類学と民族誌学を講じる一方で，チャールズ•ダーウィン（C. Darwin 1809–1882）の『人間の由来［The Descent of Man］』（1871），やエドワード・タイラー（E. B. Tylor 1832–1917）の『原始文化［Primitive culture］』（1871），ジョン・ラボック（J. Lubbock 1834–1913）の『文明の起源と人類の原始状態［The origin of civilization and the primitive condition of man］』（1870）をロシア語に訳出している。

ペトリ自身またペトリの教え子たちは，考古学資料の型式学的研究を行うこともなく，方法論的にもロシアにおける基礎を確立したとは言えない。しかし，西ヨーロッパの大学における人類学，先史学の素養を身につけたペトリが物理・数学学部の講座の初代教授に着任した影響は間接的にでも後の先史考古学の発展に寄与したことは疑いない[5]。ペトリ自身がまとめることがで

[5] モルティエの La Préhistoire: origine et antiquité de l’ homme がロシア語に翻訳され

きた概説書は先にあげた『人類学』のみであり，またそれは彼自身が目指したものの最初の一歩にしか過ぎなかった。彼が次に計画していた形質人類学を概説した第二巻は，彼の死により刊行されることはなかった。しかし，彼の息子であるベルンガルド・ペトリ（Бернгард Элдуардович Петри 1884-1937）が 1917 年に開学したイルクーツク大学歴史・文献学部に教授として招へいされ，原始文化論講座教授として考古学と民族誌学を講じ，古民族学イルクーツク学派を組織している（Сирина 1986）。ベルンガルド・ペトリの下からは数多くの著名な考古学者や人類学者が輩出されている。彼らの中から次のソ連考古学，人類学を牽引する中核的な研究者が育っており，この意味において父であるエドゥアルド・ペトリの播いた種は，時と場を隔てて継承され，花開いたと言える[6]。

3．ヴォルコフと古民族学派の形成

フョードル・ヴォルコフ（Ф. К, Волков 1847-1918）は，サンクト・ペテルブルク大学に古民族学派の伝統を構築した研究者として学史的に記憶されている。その功績は，メジン遺跡における旧石器時代の継続的調査とそこでの学生の実習の実践，また後のソヴィエト期の先史考古学研究を牽引する多くの人材を育成した点において評価されてきた。ヴォルコフがこのようにロシア考古学において古民族学研究を展開できた背景には，長年にわたりパリで人類学研究に携わった経験が大きい。これまで見たように必ずしも計画的かつ継続的であったわけではないがサンクト・ペテルブルク大学物理・数学学部における先史考古学は，海外留学組が帰国後に西ヨーロッパとりわけフランスにおける先史考古学の影響を受けて展開してきたという共通した背景

たのは 1903 年であったことを考えるとペトリによる講義が与えた影響は大きい。

[6] ベルンガルド・ペトリの下から巣立った著名な研究者には，考古学者としてはミハイル・ゲラシモフ（М. М. Герасимов 1907-1970），ゲオルギー・ソスノフスキー（Г. П. Сосновский），アレクセイ・オクラドニコフ（А. П. Окладников 1908-1981），人類学者としてゲオルグ・デベツ（Г. Ф. Дебец 1905-1969）などがいる。

を有している。ヴォルコフもまた彼の前半期の数奇な運命がパリにおいて先史考古学や人類学に触れる機会を彼に与えているのである。

3−1．ウクライナ時代のヴォルコフ

ヴォルコフの履歴の特徴は，パリにおける滞在の長さとパリ人類学会との関係にある。まずはヴォルコフがどのような経緯をもってパリに長く滞在するようになったのかという点について見ておきたい。

当初のヴォルコフの関心は，自然科学にあったようである。最初に入学したのは，ノヴォロシア大学の自然科学部であり，1867 年にキエフのウラジミール大学へ転学している。ウラジミール大学においては植物学と科学を修めている。キエフにおいてヴォルコフは，当時歴史学者・考古学者として著名であったボロジーミル•アントノヴィッチ（В. Б. Антонович 1834–1908）と知り合う。この出会いは彼の人生に大きな転機となった。アントノヴィッチの講義と発掘に参加することで初めて考古学という学問と出会うことなり，社会政治活動とも関わることになるからである。

大学卒業後のヴォルコフは，ロシア地理学協会南西支部の活動に参加している。この支部においては民族誌の情報を収集するプログラムの収集に携わっている。また同時にこの時期 1874 年にキエフで開催された第 3 回ロシア考古学大会の準備に関わり，多くの参加者の名簿づくり考古学資料の展示会，遺跡のエクスカーションに関するプログラム作りを担っている。この大会においてヴォルコフ自身も「南部ロシアの文様の特異性」という報告を行っている（Труды III Археологического съезд в Киеве, 1878）。また 1878 年，1879 年にはアントノヴィッチとともにキエフ州やヴォリンスク州において発掘調査を実施している。このようにウクライナ時代のヴォルコフの関心は，民族誌を基本としながらも考古学的な領域にも関心を有していたことがわかる。当時のウクライナにおいて民族性について深く関心を寄せることは単に学術的関心のみからでなかったことは容易に想像がつく。そのような民族性や民族文化への関心は，当時のウクライナを取り巻く民族運動と分かち難いものがあった。1879 年，ヴォルコフに運命の転機が訪れる。ヴォルコフは参

加していたウクライナ・ベロルシアの非合法の政治組織「グロマーダ」（ウクライナの民族運動）のメンバーとして逮捕され，国外へ逃れなければならなくなるのである。

3−2．フランス古民族学派との関わり

ヴォルコフは，当初ルーマニアへ逃れたが，その後スイスへ移動し，東ヨーロッパ諸国を旅している。各地でもウクライナ系住民の民族誌に関心を寄せ，オーストリア，ハンガリー，イタリアの民族誌資料や考古学資料を博物館で見学している。1887 年からはその居をパリに定め，1876 年にモルティエ（Gabriel de Mortillet 1821–1898）やブロカ Pierre P. Broca 1824–1880）が創設した人類学学院（L' Ecole d' Anthrologie de Paris）において研究に従事する。ここは当時のフランスの古民族学研究の中心的機関であり，ブロカやモルティエ以外にも，著名な考古学者や人類学者たちが教鞭をとっていた（Daniel 1978）[7]。

パリにおいて，ヴォルコフは考古学資料に強く関心を寄せるようになる。とりわけ石器資料に関心を持ち，ヨーロッパ各地やシベリア，カフカス，南ロシアにおいて収集された石器類を研究し，さらにクルガンや石人に関する資料をも集めている。モルティエに推挙されたヴォルコフは人類学協会と先史学協会に参加し，あわせてモルティエが組織した雑誌『L' Antropologie』の編集にも参加するようになる。この雑誌に数多くの人類学，考古学，民族誌学についての論文を発表する一歩で，チェコの著名なスラヴ学者でかつ考古学者でもあったニーデル（Lubor Niederle 1865–1944）の著作をロシア語に翻訳しており，これはアヌーチンの編集で『先史時代の人類社会』という題名でペテルブルクにおいて 1898 年に出版されている。

---

[7] 現在でも当時のヴァルコフがこの学校の講義に参加して残した人類学や民族誌学，考古学，古生物学についてのロシア語やフランス語のノートがウクライナ科学アカデミー考古学研究所の文書庫に残れされている（Архив ИА НАН Уклаины, Ф. 3. В/173–179）。

1900 年ヴォルコフはパリにおいてパリ万国博覧会ロシア館の開設準備に参加し，この会場において人類学と原始考古学の講義を行っている。また 1901 年と 1905 年には同様のテーマの講義をパリのロシア高等学校においても行っている。この経験と繋がりが後にヴォルコフがサンクト・ペテルブルク大学へ招へいされることに結びついていったと考えられる。

1905 年，ヴォルコフはパリ大学から自然科学の博士号を授与される。この頃すでにヴォルコフの一連の仕事は，ロシアで知られるようになっていた。それを示すようにサンクト・ペテルブルク大学ロシア人類学協会の外国会員に推挙されている。

3−3．帰国，そしてペテルブルク大学への赴任

1905 年の「血の日曜日」事件に端を発する民主化運動のなかでヴォルコフは帰国する機会を得る。帰国後にヴォルコフが得た最初の職は，帝室アレクサンドルⅢ世博物館（現ロシア博物館）人類学部門長の職であった。またこの時期，大学において人類学と民族誌学をどのように教授するかという問題が起きており，ペトリとコロプチェフスキーの死後講義が開講されていなかった。人類学・民族誌学委員会の委員長であったイノストランツェフは，1906 年 10 月 1 日の委員会において人類学と先史考古学の講義を再開することを決める。この科目の担当教員として推挙されたのがヴォルコフであった[8]。

1907 年よりヴォルコフは助教授として大学における活動を開始する。ヴォルコフの講じた人類学は，3 つの領域，すなわち解剖学的人類学，民族誌学，先史人類学で構成されている点に特徴があった。後にこれについて「歴史的情報に出現に先行する時代の形質的および生業的関係から人類の起源と発達を研究する」ことを目的としており，その基礎はモルティエの「古民族学」の視点に基づいていたことを記している（Волков 1913）。

[8] Протоколы заседаний Антрополого-этнографической коммисии, Архив музея истории СпбГУ

具体的にヴォルコフが古民族学として講じたものは，石器製作技術についての講義であり，旧石器研究やモルティエ編年についての講義であった。彼は，「すべての基礎は，地質学的（この場合は層位学），古生物学的，型式学的資料であり，石器の形態は，それと関連しており，深く観察しなくてはいけない」と述べている（Волков 1907）。旧石器時代の概説に加えて，新石器時代および金属器時代の資料についての講義も行っている。特に青銅器資料については型式学的に考察し，アジアからヨーロッパにいたるその分布についても論じている。また鉄器時代の問題としてスキタイ・サルマート文化の問題にも言及した。

地理学・民族誌学教室のコレクションを充実させることにも熱心に取り組んでいる。1907 年には，パリにおいてこの資料室用のコレクションとして前期旧石器資料，ソリュートレ文化やマドレーヌ文化期の資料を買い求めている。1909 年に人類学協会 50 周年に参加するためにパリを訪れた際には，サン・ジェルマン・アン・レーの先史学博物館の資料のレプリカを作成している。

このようなヴォルコフの下に多くの学生が集まるようになり，その中からは多くの著名名研究者が育っていく。考古学者としては同じくパリ人類学学院で考古学と民族誌学を学んだアレクサンドル・ミラー（A. A. Миллер 1875–1935），ソヴィエト期に旧石器考古学の領域で多くの成果を挙げるピョートル・エフィメンコ（П. П. Ефименко 1884–1969），同じくグレプ・ボンチ・オスモロフスキー（Г. А. Бонч-Осмоловский 1890–1943）やレフコ・チカレンコ（Л. Е. Чикаленко 1888–1965），民族学と考古学で大きな成果を挙げるセルゲイ・ルデンコ（С. И. Руденко 1985–1969），民族学者として名高いダヴィット・ゾロタリェフ（Д. А. Зоротарев 1903–1935）などがいる。シベリアの考古学に重要な足跡を残したセルゲイ・チェプロウホフ（С. А. Теплоухов 1888–1934）もカザン大学に籍を残しながら，ヴォルコフの下で学んでいた。

3－4．メジン旧石器遺跡の調査

ヴォルコフの教授法の特徴は，最初の講義から学生に自らが独自に取り組む課題を与えた点にあった。このことは教え子の一人であるセルゲイ・ルデンコが，当時に触れて「フョードル・コンドラチエヴィッチの講義はその内容，驚くほど組織化された内容に特色があった」と述べている（Руденко С. И. 1968）。各学生に課題を与え実際に資料の分析を行わせたり，積極的に発掘調査を実施させてもいる。このような指導の一環として 1908 年にはエフィメンコがかつてメレジュコフスキーがクリミアの洞窟で採集した石器の分類作業を行い，ルデンコは 1909 年にオブドルスク州でウスチ・ポルイスク墓地遺跡の発掘を行っている。従来の研究の再評価も積極的になされ，特にヨーロッパ地域の資料との比較研究が行われた。エフィメンコは，1911 年の夏にノヴゴロドスク州とトベルスク州の湖岸を調査し，数多くの石器や土器を採集している。これらの資料について石器の形態学的研究とヨーロッパ出土の資料との比較研究が行われ，それまで多くの研究者が旧石器時代の資料と年代づけていたこの地域の資料を新石器時代に属するものとする結論を導き出している（Ефименко 1916）。

野外実習を確立させたこともヴォルコフによる功積のひとつである。現在においてもロシア平原の旧石器時代の代表的遺跡として知られているチェルニゴフ郊外のメジン遺跡の調査はヴォルコフによって開始された[9]。

1908 年から開始されたこのメジン遺跡の調査とその出土資料の整理作業には，多くの学生が参加した。しかしながら体調の不良からヴォルコフ自身が直接野外で調査を指導したのは 1908 年の初年度のみで，2 年目以降はエフィメンコとチカレンコがヴォルコフの指示を受けて調査を指導している。1911 年からメジン遺跡についての報告がサンクト・ペテルブルク大学付属ロシア人類学協会の紀要に報告されている。これら一連の報告は，主にルデン

[9] 出土資料は，先のパリでの人類学協会 50 周年記念の大会において報告され，フランスの研究者の注目を集めた。彫刻を施されたマンモスの牙や女性像の彫像は多くの関心を呼んだ。

コ，エフィメンコ，チカレンコによってなされているが，石器の実測図専門的な記述を伴ったロシアで最初の学術報告と位置付けられている（Формозов 1983, с. 106）。

この時期のヴォルコフの研究室の活発な学術活動は，考古学の領域にとどまらない。民族誌学と考古学の融合を構想していたヴォルコフの指針に従って，ゾロチャレフやボンチ・オスモロフスキーなどによる人類学や民族誌学についての報告が大学の紀要に掲載されている。

ヴォルコフの教え子たちの海外への留学も進められ，1913 年ルデンコはパリ人類学センターにおいて旧石器時代遺跡と洞窟遺跡の研究に従事するため留学する。またエフィメンコは同年，国民教育省から 15ヶ月間の海外研究に派遣されている[10]。

3－4．人類学教室の構想と挫折

ヴォルコフには，大学内に独立した人類学研究室を設置したいという希望があった。従来の地理学・民族誌学研究室では，人類学は細分科目としての位置づけしかなかったからである。またフランスへ留学していたルデンコは帰国し，1916 年には助教授に着任していた。当時，他の学部においてもロストフツェフが歴史・哲学学部においてスキタイ・サルマートの考古学を講じており，スピーツィンも歴史・哲学学部において新石器時代や青銅器時代の考古学を講じていた。

大学内での組織再編のためにヴォルコフは，国会の教育問題委員会に意見書を送付している[11]。それによれば歴史学•哲学学部には，古代考古学や古典

[10] このときのエフィメンコの海外研修は，フランスのサン・ジェルマン・アン・レーの先史学博物館のほか，ル・セザール遺跡やシェル遺跡の見学や資料調査が含まれ，イギリスでは大英博物館での資料調査を行っている。またヨーロッパの滞在のあと，巡見したパレスチナとインドでは資料を収集している。東アジアとしては中国，日本によっており，帰国後行われた報告には，パレスチナの先史に加えて，日本の先史時代についての報告を行ったとの記載がある（Архив ИА НАН Украины, ф. 3, Ед. В/2322）。

[11] Архив ИА НАН Украины, ф. 3, Ед. В/4897

考古学そしてロシア考古学と東洋考古学を講じる総合考古学の講座と先史考古学（古民族学）と民族誌学を講義する歴史地理学講座を創設する。一方で物理・数学学部においては，人類学講座（広い意味で解剖学的人類学，古民族学，民族誌学を含む）を設置するというものであった。

この試みは，結果的にはヴォルコフが博士学位を取得していないことから見送られたとされる。当時のロシアの大学においては外国で取得した博士学位を認定していなかったためヴォルコフのフランスにおいて取得した学位は，教授資格とみなされなかったのである。しかし，そのような正式な政府サイドの資格に対する評価のみがヴォルコフの構想を止めたわけではない。そこにはペテルブルクの古民族学派に対して厳しい評価を下し，当時のロシアの先史考古学を牽引していたモスクワ大学のアヌーチンの意図が働いていた。このアヌーチンの評価を裏付ける資料としてエフィメンコからルデンコへあてた手紙が残されている[12]。これはヴォルコフの教え子であるエフィメンコがモスクワ大学のアヌーチンの講座においてマギストルの資格取得審査を受けた際にアヌーチンから厳しい批判を受けたこと記したもので，アヌーチンはペテルブルク大学の古民族学派に対して，厳しい評価を下していると記されている。

結局，1917 年の革命以前にはサンクト・ペテルブルク大学[13] における考古学研究は，系統だった組織として再編されることはなかった。数奇なことにこの再編がなされるのはソヴィエト政権下においてであり，その後のソヴィエト政権下の政治の学術領域の介入の中でヴォルコフの学派は粛清の対象とされていくのである。

---

[12] Архив ИА НАН Украины, ф. 3, Ед. В/2373

[13] サンクト・ペテルブルク大学の名称は，街の名称の変化と共に変遷している。サンクト・ペテルブルク市は，第一次世界大戦の折，ドイツ語名である理由からペテルグラード（1914 年より）に変更され，大学名も合わせてペテルグラード大学に改称されている。また 1924 年にはレニングラードとなった。更に 1991 年に再びサンクト・ペテルブルクとなっている。

4．古民族学のソヴィエト考古学における位置づけ

1918 年のヴォルコフの死後もサンクト・ペテルブルク大学付属ロシア人類学協会の活動は，1920 年代まで継続される。しかし，1918 年大学に地理学研究所が開設されると，その中の民族誌学部に考古学講座が設置される。また 1925 年に地理学研究所が大学の地理学部となると，さらに再編成が生じ新たに民族誌学部門，人類学部門が設置され，ヴォルコフの教え子たちであるルデンコ，エフィメンコ，ゾロタリェフ，ボンチ・オスモロフスキー，チェプロウホフが教壇に立っている。彼らの講じた人類学は，人類の起源，古人類学，古民族学に関する諸問題であった。この枠組みこそ正にヴォルコフの構想した古民族学であったと言えよう。ヴォルコフの構想は，教え子たちによって開花したのである。

ヴォルコフの教え子の中でもエフィメンコとルデンコは，方や旧石器考古学の新たなリーダーとして，また方や卓越した民族学者・考古学者として 1920 年代の新たなソヴィエト考古学を牽引する役割を果たした。彼らの名は学史的にもコスチョンキ遺跡群やパズィリク古墳というロシアを代表する遺跡の調査者として高く位置づけられている。

1919 年新たに成立したソヴィエト政権は研究機関の再編に着手する。1918 年 1 月 1 日にロシア国立考古学委員会は，エルミタージュにおいて新たな国家的な考古学組織の設置を決議する。翌 1919 年 4 月 18 日には，ソヴィエト人民会議議長ウリヤーノフ・レーニンによってペテルグラード（旧サンクト・ペテルブルク）にロシアアカデミー物質文化史研究所（ライムク：РАИМК）を創設することが認められる。これ以降のソヴィエトロシアの考古学を推進する中心機関となるのである。またロシアアカデミー物質文化史研究所は，1926 年に国立アカデミー物質文化史研究所（ガイムク：ГАИМК）に改称されている。

ガイムクの部門構成は，民族学部門，考古学部門，芸術学部門の 3 部門構成がとられた。民族学部門ではミラーらによる古民族学と民族学的人類学が

展開され，また 1927 年にエフィメンコを団長に古民族学調査団を組織している。この調査団にはレニングラード大学（街の名称の改称に従い大学名も改称）の考古学科の学生が参加してレニングラード州の考古地図と遺跡情報の収集をおこなった。

このようにロシア革命以後の 10 年間の古民族学研究は，ソヴィエト考古学の中において一定の位置づけをもち発展していったと見なすことができる。しかし，1929 年以降は古民族学派を取り巻く環境は急展開することとなる。1929 年春のレニングラード大学[14] の「学生新聞」に大学教授陣への批判的文章が掲載される[15]。ここで批判された教授陣の中にルデンコ，ボンチ•オスモロフスキーそしてチェプロウホフが含まれていた。最も激しい批判はルデンコに向けられたものでルデンコを「科学のペテン師」と中傷し「反動教授」のレッテルを張るものであった。やがてルデンコは，教授リストから外され，ボンチ・オスモロフスキーやチェプロウホフとともに大学から追放される。

この動きは，古民族学派全体に対する排斥行動であり，レニングラードのみではなくモスクワにおいても同様に古民族学派を名乗った研究者への批判がなされている。さらに 1930 年代にはルデンコ，ボンチ•オスモロフスキー，チェプロウホフ，ジューコフ，グリャズノフなどが逮捕される。チェプロウホフとジューコフは 1937 年に粛清され，イルクーツク大学で教授となっていたエドゥアルド•ペトリの息子のベルンガルド•ペトリも逮捕され 1937 年に銃殺されている。

古民族学派は，スターリン期のブルジョア科学批判の嵐の中で，「ブルジョア的物質主義」を母体とする移住理論とともに批判，粛清の対象となったのである。

[14] 旧サンクト・ペテルブルク大学を改称。

[15] Студентская правда 1929, 20 мая

5．古民族学批判の背景

ここで疑問が残るのは，なぜ革命以後の 1920 年代には大学においても国立アカデミーにおいても積極的に実践され受け入れられていた古民族学が，1930 年代に一転して否定されさらには政治的粛清の対象となったのかという点である。

当時の古民族学の特徴は，型式学的手法による資料に分析と移住拡散理論による文化変化の説明という特徴があった。革命後 10 年が経過したソヴィエト考古学では，なによりも，未解決の課題の解決を目指し，革命以前の考古学とは別の方向性を目指すことが求められた。そのような中で 1930 年代初頭に新世代（革命後世代）による革命以前からのロシア考古学の系譜をひく研究の流れに対する厳しい評価が加えられるようになるのである。ペテルグラードにおける古民族学派批判の急先鋒であったウラジスラフ・ラヴドニカス（В. И. Равдоникас 1894–1976）は，1930 年に旧世代を批判した論文とて著名な『マルクス主義者のための物質文化史』を著す（Равдоникас 1930）。その中で，ラヴドニカスは，革命以前の考古学の流れの中で美術史的「形式主義的美術学」と演繹的・分類主義の「型式学的物質主義」両者を否定している[16]。とりわけ批判の対象となったのは，各学派が採用していた文化変化に対する解釈としての移住理論と拡散主義であった。これらが西欧的民族主義として強く批判されたのである。

古民族学は，これまで見てきたようにその系譜をフランスの古民族学にもち，大きな影響を受けていた。この点も革命以前のロシア考古学から脱却し，新たな社会主義国家の中での新たな科学の創成を標ぼうする彼らからは考古学における「ブルジョア科学」として批判の対象となりやすかったと言える。

[16] ここで自らの師であるスピーツィンの「経験主義」については批判の対象としておらず，むしろそれとの比較でゴロドツォフの手法を批判している。しかし一方でモスクワで旧世代への批判を添加したのはゴロドツォフの教え子たちであった。

もう一点，重要な点は，このような旧勢力への批判において新世代の批判勢力が属していた学派との関係を指摘しておきたい。先に述べて批判の急先鋒であったラヴドニカスは，スピーツィンの教え子であり，歴史・哲学学部の考古学研究室出身であったという点である。詳細を論じる資料に不足するが，ラヴドニカスの個人的な学派間の対抗心が悲劇的な学問的闘争を生んだ可能性も指摘しておきたい[17]。いずれにせよ 1930 年代の批判，粛清の対象の多くは，古民族学派であった。また当時のガイムクは，東洋言語学部の教授であった言語学者マルの下で統括されており，ラヴドニカスらもマルによる新たな言語理論「発展段階理論」にもとづく民族史研究に大きくシフトしていったのである[18]。

おわりに

ロシアにおける先史考古学は，歴史学の系譜の中のみに起源をもつのではなく，自然史研究の中にその系譜を有する点に特徴がある。本論では，革命以前のサンクト・ペテルブルク大学の自然科学系の学部において古民族学派の伝統が形成されてきた歴史的流れと背景を辿ってきた。

古民族学派は，1930 年代のスターリン期の粛清の嵐の対象となり，多くの研究者が失われるという悲劇的な結末を迎える。しかし，1960 年以降のソヴィエト考古学における民族学的手法の導入の過程には，この古民族学の影響を認めることができる。一方でこの古民族学の基礎の形成と人材育成に大きな力を注いだヴォルコフについては，1960 年代においても「ウクライナのブルジョア民族主義者」という位置づけのままであった（Левин 1960; Токарев 1966）。

[17] この点については，古民族学派の中でエフィメンコのみが粛清の嵐を逃れており，ラヴドニカウとの関係も含めて改めて検討したいとおもう。

[18] ただしラヴドニカスも古民族学の手法については評価をしており，民族誌を用いずに物質文化史研究を進めることは不可能であることも指摘している（Равдоникас 1930, с. 76-78）。

古民族学派は先史考古学の領域を開拓しつつ，人類史を自然科学的視点，すなわち地質学，地理学，人類学，生物学などを組み合わせた学際的研究として取り組んだ方向性については，改めて評価すべき点が多いと思われる。1930 年以降のソヴィエト考古学がむしろ社会ダーウィニズム的方向性を色濃く提示するのとは別の進化論的（ダーウィン的）系譜が革命以前に存在した点は改めて記憶する必要があるであろう。

引用・参考文献

加藤博文　2008 「ロシアにおける考古学の成立(1)」『北方人文研究』第一号，北海道大学大学院文学研究科北方研究教育センター，pp. 87-104.

角田文衛　1971 「考古学の歴史　ヨーロッパ」八幡一郎・大場磐雄・内藤政恒監修『新版考古学講座』第 10 巻，雄山閣，p. 6.

Daniel G. A. 1978 *Hundred and fifty years of archaeology*. Cambridge, p. 103.

Trigger, B. 1989 *A History of Archaeological Thought*, Cambridge university press.

Волков Ф. К. Преподавание антропологических наук при кафедре геолографии со времени учреждения отдельной приват-доцентуры в 1907, *Архив музея истории СпбГУ* д. 338, л. 57.

Волков Ф. К. 1913 Новейшие направления в антропологических науках и ближайшие задачи антропологии в России, *Ежегодник РАОПУ* т. 4, СПб, с. 1-8.

Гегниг В. Ф. 1982 *Очерки по истории советской археологии*, Киев.

Ефименко П. П. 1916 Некоторые находки каменный орудий в Творской и Новгордоской губерниях и их место в системе европейской палеонтологии, *Русский антропологический журнал* №1-3, с. 66-82.

Леведев Г. С. 1992 *История отечественной археологии 1700-1917*, СПб.

Левин М. Г. 1960 *Очерки по истрии антропологии в России*, Москва, с. 124.

Мережковский К. С. 1880 Отчет о предвальтельных исследованиях каменного века в Крыму, *Известия РГО*, т. 16, №2, с. 106-146.

Мережковский К. С. 1881 Отчет об антропологической поездке в Крым, *Известия РГО*, т. 17, №2, с. 104-130.

Невский В. В. 1977 Кафедра географии и этнографии в Петербургском университете, *Учен. зап. ЛГУ, геог. наук,* вып. 25, с. 13-23, Ленинград.

Петри Э. Ю. 1890 *Антропология* т. 1, основны антропологии, СПб.

Равдоникас В. И. 1930 *За марксистскую историю материальной куритуры, ИГАИМК т.* 7, вып. 3-4, с. 49, 76-78.

Руденко С. И. 1968 Памяти Ф. К. Волкова, *С-Петербургский филиал архива Россиискоӥ Академии наук*, Ф. 1004, Оп. 1, Д. 132, Л. 18.

Сирина А. А. 1986 Б. Э. Петри: к вопросу о становлении «Иркутской школы» советской археологии и этнографии, *Археологические и этнографические исследования в Восточной Сибири*, с. 30–33, Иркутск.

Токарев С. А. 1966 *История русской этнографии*, Москва, с. 318.

Тихонов И. Л. 1995 *Санкт-Петерберг и отечественная археология*, СПб.

Труды III *Археологического съезд в Киеве*, 1878, Киев, 1878, Т. 1, с. 78–85.

Формозов А. А. 1986 *Страницы истории*, Москва.

Формозов А. А. 1983 *Начоло изчения каменного века в России*, Москва.